

「かみ添」の仕事展——聴竹居に唐紙をそえる

図案を考える 木版を制作する 和紙を選ぶ

絵の具を調合する 和紙に化粧をする

とてもシンプルな手仕事です。

余白のリズム 木地の癖 紙の温かみ 絵の具の揺らぎ

目には見えない「色」を添えるのが、かみ添の仕事です。

—— 嘉戸浩（唐紙師・かみ添主宰） ——

聴竹居

京都府乙訓郡大山崎町大山崎谷田 31
JR 京都線「山崎」駅、阪急京都線「大山崎」駅よりいずれも徒歩 7 分

2018 年 4 月 21 日（土）・22 日（日） 要予約

見学（各 1 時間）	21 日（土） 9:00 / 10:30 / 14:30 22 日（日） 9:00 / 10:30 / 13:00 / 14:30
ワークショップ	21 日（土） 12:30-14:15
トーク	21 日（土） 16:30-18:30 「美術と唐紙：それらをとりまく空間をめぐる」 須田悦弘（現代美術家）× 嘉戸 浩 22 日（日） 16:30-18:30 「建築と唐紙：それらをうみだす素材について」 三浦史朗（構匠）× 嘉戸 浩

<http://kamisoe2018.info>

【主催】かみ添展@聴竹居実行委員会 【後援】一般社団法人 聴竹居倶楽部

【協力】にほんちやギャラリー-おかむら、柳々堂、おおうちおさむ、木村幸央、中井五絵、藤田幸生 【企画協力】森 桜

聴竹居倶楽部

左：聴竹居（設計：藤井厚二、1928年） 右上：木版「聴竹居」（2018年、杉） 右下：唐紙「聴竹居」（2018年、鳥の子紙に銀雲母）
photo by Joe Shimizu (左)、Yasushi Ichikawa (右上、右下)

「かみ添」の仕事展

—— 聴竹居に唐紙をそえる

聴竹居倶楽部

京都の大山崎にある昭和初期の住宅「聴竹居」で、唐紙の工房「かみ添」の仕事を紹介する展覧会を開きます。

かみ添を主宰する嘉戸浩(かごこう)は、ニューヨークでデザイナーとして活動した後、唐紙の魅力にめざめ、京都の老舗工房で修行し、34歳で独立。以来、国内の寺院から海外の店舗まで様々な場所に、また扇子、履物、酒瓶のラベルやイベントの招待状など、多様な用途に唐紙を提供してきました。洗練されたグラフィック・センスと伝統技法をあわせもつ嘉戸の仕事は、ものづくりに関わる人はもとより、素材にこだわり丁寧な暮らしを求める人々の支持を静かに集めています。一方、会場の聴竹居(ちようちくきょ)は、建築家の藤井厚二(ふじいこうじ/1888-1938)が設計し、1928(昭和3)年に建てられた自邸です。藤井は環境工学の先駆的な研究を続けながら、日本の気候や風土にあった理想の住宅を求めてこの家をつくりました。特に「室内の美は紙に尽きる」と、調湿や散光に優れた和紙を襖や障子から壁紙、照明器具にいたるまで多用し、「安らぎ」のある空間を生み出しています。藤井が求めたのは、木と紙による長い歴史をもつ日本の文化を見直し、今の暮らしに繋がるエッセンスを引き出すことでした。

今回の展覧会では、よりよく使いながら聴竹居の価値を広め、後世に伝える同倶楽部の活動に賛同し、藤井の思想に共感する嘉戸が聴竹居のための新作を発表します。また、独立後8年半で手がけた多様な唐紙の変遷とともに、アーティストや建築家の依頼でつくった特注の仕事や、木版、道具などもごらんいただきます。これまで仕事をともにしてきた現代美術家の須田悦弘、構匠の三浦史朗とのトークや唐紙づくりを体験するワークショップも行います。トークでは「鍵善良房」の特製干菓子を楽しむ時間も設けます。

藤井の集大成である最後の自邸に嘉戸が唐紙を添えることで、日本の伝統をモダンの視点で見直すことの意味と広がりを感じ取っていただけたら幸いです。

嘉戸浩さんの唐紙は、

そこはかとない品ときらりと光るセンスを感じます。

—— 須田悦弘

ひかり・ときの移ろいを映し出す、

くらし・ことばの舞台背景である。

—— 三浦史朗

【会費】

見学 1,500円(建物見学科1,000円込)

トーク 2,500円(見学科1,500円込、「鍵善良房」特製干菓子とお茶付)

ワークショップ 3,500円(見学科1,500円込、唐紙便せん3枚制作とお持帰り)

*見学科の一部は、聴竹居の運営費に活用されます。

【定員】 見学 各15名、トーク 各30名、ワークショップ 8名

【参加資格】 小学校4年生以上

【申込開始】 2018年3月22日(木)(先着順、定員になり次第終了)

【申込方法】 ウェブサイト(<http://kamisoe2018.info>)をご覧ください。

【問合せ先】 morisakura@nifty.com (森 桜)

嘉戸 浩(かごこう) 唐紙師・「かみ添」主宰

1975年京都市生まれ、1998年嵯峨美術短期大学専攻科プロダクトデザイン学科卒業、2001年 Academy of Art University, San Francisco 卒業、ニューヨークでデザイナーとして活動後、帰国。京都の老舗唐紙工房で修行、2009年独立、工房兼ショップ「かみ添」を京都の西陣にオープン。店舗の仕事に、鮎の宿つた屋(京都)、Kajitsu(ニューヨーク)、鍵善良房(京都)、鶴屋吉信(東京店)など。アーティストの須田悦弘、ミヤケマイ、鹿児島睦、Marie-Ange Guillemot、softpadなど、建築家のファムス、三浦史朗、中村好文、アトリエワンなど、デザイナーの八木保、西岡ペンシル、永井裕明などに唐紙を提供。[photo by Yasushi Ichikawa] <http://kamisoe.com>

須田悦弘(すだよしひろ) 現代美術家・多摩美術大学客員教授

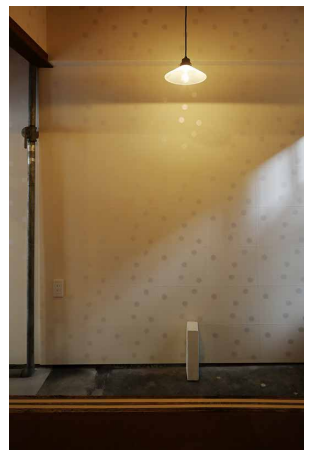
植物を木彫で精緻につくり、建物の片隅に置いて、空間全体を作品とする。1969年山梨県生まれ、1992年多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業、1997年はスペイン、台湾、スイスで個展、「茶の湯」(東京国立博物館、東京)、「Jardins」(グランパレ、パリ)、などに出品。作品の所蔵先に原美術館(東京*)、アサヒビール大山崎山荘美術館(京都)、国立国際美術館(大阪*)、直島コンテンポラリーアートミュージアム(香川*)、ボンビドーワ・センター(パリ)など。(*は常設展示)

三浦史朗(みうらしろう) 構匠・(株)三角屋取締役・(株)六角屋代表取締役

京都を拠点に木や石などの天然素材を使い、数奇屋づくりの住宅や店舗の設計と施工を手がける。1969年京都市生まれ、1995年早稲田大学大学院修了、中村外二工務店設計部に勤務後、1998年独立、(株)とふう設立(2005年三角屋に改称)。2012年(株)六角屋設立。近年の主な仕事に東京糸井重里事務所(現(株)はば日本社)内装工事/2016年など。[photo by Bishin Jumonji] <http://sankakuya-inc.jp/>

鍵善良房(かぎぜんよしふさ)

江戸の享保年間(1716-36)に創業した祇園の菓子舗。創業当時の「菊寿糖」(落雁)と昭和の初めに誕生したくずきりが有名。四条本店には十二代店主が懇意にした黒田辰秋の棚や河井寛次郎の壺などが残る。2014年よりお品書きの紙をかみ添が制作し提供。 <http://www.kagizen.co.jp>



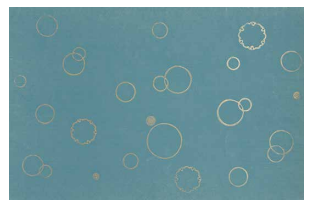
1



2



3



4

